

令和6年度

福井県小学校長教育研究 二州大会研究紀要

2024 No. 50



福井県小学校長会

〈表紙の写真〉



**自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る
日本人の育成を目指す小学校教育の推進**

－ 夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び
未来を生き抜く力を育成する学校経営 －

研究紀要 No.50 (2024)

福井県小学校長会

全体会



分科会

第1分科会



第2分科会



第3分科会



第4分科会



第5分科会



第6分科会



第7分科会



第8分科会



目 次

挨拶	福井県小学校長会長	氣 谷 達 郎	6
祝 辞	福井県教育長	藤 丸 伸 和	8
	敦賀市長	米 澤 光 治	10

大会要旨

大会主題・大会趣旨	11
大会日程	12
分科会概要	13

分科会主題別研究

第1分科会 提案者	福井市六条小学校長	藤 木 隆 之	16
第2分科会 提案者	坂井市立三国南小学校長	矢 部 正 道	18
第3分科会 提案者	福井市一乗小学校長	宮 本 正 三	20
第4分科会 提案者	小浜市立内外海小学校長	一 瀬 泰 史	22
第5分科会 提案者	勝山市立平泉寺小学校長	白 木 久 子	24
第6分科会 提案者	美浜町立美浜西小学校長	前 田 由美子	26
第7分科会 提案者	越前市服間小学校長	上 島 雅 恵	28
第8分科会 提案者	鯖江市鯖江東小学校長	加 藤 昌 広	
	鯖江市片上小学校長	茨 田 隆 徳	30

福井県小学校長教育研究大会主題・副主題一覧表	32
------------------------	----

あとがき

福井県小学校長教育研究委員長 敦賀市立中郷小学校長	木 原 茂 子	34
---------------------------	---------	----

挨拶



福井県小学校長会長 氣 谷 達 郎

ご参会の皆様こんにちは。本日は、第76回福井県小学校長教育研究二州大会にご参加いただき、ありがとうございます。

本大会の主題は、全国連合小学校長会の研究主題でもある「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」であり、副主題には「夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び 未来を生き抜く力を育成する学校経営」を掲げています。教育の未来を見据えたテーマのもとで、県下の小学校長が一堂に会することができましたことを、大変嬉しく、またありがたく思っております。

まず、本大会の開催にあたりご後援をいただいております福井県教育委員会、ならびに敦賀市・美浜町および両市町教育委員会のご支援に、会員一同、深く感謝申し上げます。また、公務ご多忙の中にもかかわらず、福井県教育長 藤丸 伸和 様、敦賀市長 米澤 光治 様をはじめ、ご来賓の方々にご臨席を賜りましたことに心よりお礼申し上げます。誠にありがとうございます。

夏休みも終わりに近づき、日の入り後には少しばかり心地よい風を感じることができるようになってきましたが、今年も非常に暑い夏となりました。福井市では、近年の厳しい暑さを受けて、例年午後に行われていました夏休みのプール開放が、今年は、報道にもありましたように、朝8時半から10時半までの2時間に変更されました。「涼しい朝のうちに勉強をして、昼から元気に遊ぶ」ではなく、「何とかしのげる朝のうちにプールで泳ぎ、昼からはエアコンの効いた室内で過ごす」というのが新しい形になりつつあるようです。気候の変化が生活スタイルに影響を与えていることを実感します。

このような中、私の勤務校では校長室のエアコンが故障し、扇風機だけで7月と8月を過ごすことになりました。朝から徐々に上昇する室温の変化にはなかなか気づかないもので、知らぬ間に33度、34度になっていることが幾度もありました。時折入ってくる職員から「校長先生、危ないですよ」と声をかけられる始末でしたが、幸いなことに体調を崩すようなことはありませんでした。「家にいながら熱中症にかかる人はこのようにしてなるのか」と熱中症のリスクを実感する貴重な機会となりました。経年劣化でエアコンが故障した学校はほかにもあると聞いていますが、酷暑を無事に乗り切られましたでしょうか。

さて、先月、全連小の小学校長会長連絡協議会に出席いたしました。会の概要は、校長会事務局からメールで送られた「全連小速報」で報告されているところです。ちょうど高知県でのプール事故の後ということもあり、急遽、安全確保のあり方についても情報交換が行われました。

また、中教審の話題も取り上げられました。中教審は、昨年、文部科学大臣から「『令和の日

本型学校教育』を担う質の高い教師の確保のための環境整備に関する総合的な方策」について諮問されました。それを受けて「質の高い教師の確保特別部会」が設けられ、約1年間にわたり検討が行われた結果が、「審議のまとめ」として5月に示されました。「審議のまとめ」では、①学校における働き方改革の更なる加速化、②教師の処遇改善、③学校の指導・運営体制の充実、の3本柱の一体的・総合的な推進が提言されています。この提言は、あくまでも「すべての子どもたちへのよりよい教育の実現」のためであることが大前提です。ちょうど今朝の新聞には、県の総合教育会議での「大綱」の見直し案についての記事がありましたが、「子どもが主役の教育の推進」ということが記されています。学校現場では、これらの動きを的確に理解し、「子どもが主役」を適切に解釈して、変化の中で教育の質を一層向上させるための具体的な取組を進めることが重要です。私たち校長には、更なる働き方改革を推進し、「教職員が働きやすさと働きがいを実感しながら、子どもたちの主体的な学びの伴走者となる」そのような環境を整えることが求められているのです。

本日は、8つの分科会で、協議や意見交換が予定されています。提案や話題提供をしてくださる校長先生方、この日のためにご準備いただきありがとうございます。この分科会は、「すべての子どもたちへのよりよい教育の実現」に向けて、私たちが、他校の取組や、他の校長先生方の考え方から学び、ヒントを得ることができる貴重な機会です。活発な議論を通して、県内の小学校教育の更なる発展に寄与する有意義な会となることを願っております。また、再来年の令和8年10月には、東海・北陸地区連合小学校長会教育研究福井大会が開催されます。県内小学校長の結束のもとで、校長としての学びの成果を提案できる大会となるよう、本大会が次の一步への新たな出発点となることも期待しております。

終わりに、本研究大会の開催に向けて、計画・準備に多大なるご尽力をいただきました敦賀市・美浜町の校長先生方に、改めて深く感謝申し上げ、開会の挨拶といたします。本日は、どうぞよろしくお願い申し上げます。

祝 辞



福井県教育長 藤 丸 伸 和

令和6年度の第76回福井県小学校長教育研究二州大会の開催にあたりまして、お祝いを申し上げます。

本日お集まりの小学校校長会の皆様方には、日頃より子どもたちの健全育成に多大なるご尽力を賜りまして、本当にありがとうございます。この場をお借りして、心からお礼を申し上げます。

また、本日の研究大会の開催にあたりまして、氣谷会長はじめ校長会の皆様、そして地元の敦賀市、美浜町の皆様には多大なるご協力、ご支援いただきましたことを、重ねてお礼申し上げます。ありがとうございます。

私は、5月19日に教育長に就任をさせていただきました。精一杯この教育行政、福井の教育を前に進めていけるように頑張っていきますので、皆様のご支援をどうぞよろしくお願いいたします。

私は県の職員として、3月までは未来創造部の部長を務めておりました。北陸新幹線の整備促進、まちづくり、交通政策等に携わってきました。この3月に、北陸新幹線がついに福井、敦賀に開業しました。この敦賀は当面の終着駅として、大変な賑わいを見せている状況です。

私は、「まちづくり」というのは「人づくり」と不可分なものだなというふうに考えています。まちの未来をつくるのは、やはり人です。その人を育てるこの教育の役割の大きさ、責任の重さを感じているところです。

福井の未来はとても明るい、私は思っています。この北陸新幹線が開業し、そして多くの観光客、ビジネス客が福井に訪れ、これまであまり福井を知らなかった方も、福井に来てみて「福井って結構いいよね」「人もあったかいし、食べ物も多いし、見るところもたくさんあるよね」というふうに言っていただきます。こうしたことが、我々の自信と誇りにつながっていきます。

福井県民は、ともすると、ちょっと自虐的に「福井には何もないよね」とか「福井って地味だよ」と、ついネガティブな言葉を無意識に発してしまうことがあったように思います。これからは、福井の良さをどんどん我々大人が子どもたちに伝えていくということが、何より大事であると思っています。「福井の将来が明るい」そして「福井の良いところがたくさんある」こうした前向きな言葉をぜひ子どもたちに伝えていただきたいと思います。「何もない」と大人に言われて育った子どもたちが、将来福井に残ってくれるのか、ということが私の気がかりな点です。そうしたことを、これから払拭していきたいと思っています。

昨日、知事と教育委員と意見交換をしながら、「教育に関する大綱」の改定に向けて準備を進めたところであります。「教育に関する大綱」は、5年前に策定し、今回はその改定となります。

5年前に大きくモデルチェンジをしましたので、今回は基本理念や目指す人物像、育てたい人物像については維持をしながら、具体的な政策のところを新たに書き加えています。

近々、ホームページにもアップしますので、ぜひ校長先生方にも一読いただき、ご意見を賜りながら10月の策定に向けてさらに作業を進めてまいりたいと考えております。

地域の未来が明るいということを子どもたちに伝え、そして自分の将来をどう過ごすのかということを考えていくような「ライフデザイン教育」を推進してまいります。小学生から未来への希望と夢を育むためには、地域で頑張っている大人たちの生き様を見せていくというようなことも、さらに重要になってきます。そうした取組も拡充していきますので、皆様方の一層のご支援ご協力を賜りたいと思います。

今回の大会主題「自ら未来を拓きともに生きる豊かな社会を創る」そして副題の「夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び未来を生き抜く力を育成する」という考え方を、まさに我々が今議論している教育大綱に盛り込んでいるところです。本日の8つの分科会での議論が、素晴らしい意見交換になることを祈念しております。

結びに、本研究大会のご盛会と、そして本日お集まりの皆様方のますますのご活躍を祈念いたしまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

祝 辞

敦賀市長 米 澤 光 治



第76回福井県小学校長教育研究二州大会が盛大に開催されることを心よりお喜び申し上げるとともに、敦賀市を代表し歓迎の意を表します。

日頃は、福井県の小学校教育の充実・発展にご尽力されていることに、深く感謝申し上げます。

本市は令和6年3月16日に北陸新幹線が開業し、新たに「ターミナル駅」としての役割を担うことになりました。古代は、松原客館が置かれ大陸の玄関口として、近世は、北前船の寄港地として、近代は、日本海側初の鉄道が敷布され欧亚国際連絡列車の発着地として、どの時代においても常に交通の要衝の役割を担うとともに、多くの人が集まり、様々な文化が入り混じる地として栄えてきました。昭和期には、「人道の港」として、ポーランド孤児やユダヤ人難民を温かく迎え入れたのも、長い歴史の中で多様な文化や価値観を尊重する風土が醸成されてきたからこそと感じております。

近年は変化の激しい時代と言われています。本市は時代のニーズに応じて、共生社会の実現に向けたパートナーシップ宣誓制度を採択し、一人一人の多様性を認め合う中で、自分らしく生きることができる社会の実現に取り組んでいるところです。

さて、本年度は第8次敦賀市総合計画において、各政策分野が連携して人口減少対策を推進していく中で、「好循環のうねりを生み出す」しくみを構築し、子育てと教育を中心施策と位置付け、子どもを産み、育てやすい環境づくりを目指しています。

特に教育分野におきましては、プログラミングスキルが習得できる学びの場を創出することや、英語によるコミュニケーション能力をさらに伸ばしていく施策等を通して、たくましく未来を生きていく力をつけてもらいたいと考えています。

本日お集まりの校長先生方におかれましては、大会テーマにありますように、「夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び、未来を生き抜く力を育成する学校経営」の最前線に立たれ、日々ご尽力のことと思います。私どもとしましても皆様方と手を取り合い、未来を担う子どもたちにとって、夢と希望のあふれる社会を創造していくことが使命だと感じています。

結びに、本大会が実り多いものになりますとともに、皆様の益々のご健勝とご活躍を祈念いたしまして、私の挨拶とさせていただきます。

令和6年度 第76回福井県小学校長教育研究二州大会実施要項

- 1 大会主題 「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る
日本人の育成を目指す小学校教育の推進」
ー夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び
未来を生き抜く力を育成する学校経営ー

2 大会趣旨

今日の知識基盤社会においては、先端技術の高度化やグローバル化により急激な社会変化が進み、あらゆる分野で価値観も多様化してきている。また、大きな自然災害や学校事故に対する危機管理能力の向上、教育 DX の推進などの大きな改革への適切な対応が求められている。さらに、少子高齢化や人間関係の希薄化、家庭教育力の低下や人権・貧困問題等、子どもを取り巻く社会的要因も複雑に絡み合い、変化の激しい予測困難な現象や社会問題が山積している。

このような問題が出現する未来社会を、子どもたちが豊かに健やかに生き抜いていくためには、初めて出会う様々な問題にも主体的に挑戦し、他者と協働して知恵を出し合い、解決したり、新たな価値を創造したりする力を育成していかなければならない。また、様々な人とのつながりの中で学び合い、自らの人生や社会をよりよくしていこうとする思いや、持続可能で豊かな未来社会を創り出すことに貢献しようとする意欲を育てることも大切である。

そのためには、一人一人が志をもち、可能性に挑戦する態度と豊かな知性と感性に裏打ちされた人格形成を図りながら、「夢と希望」を育むことが大切である。そして、「夢と希望」をもつことが礎となって、子どもたちは学ぶことの意味や価値を見出し、難しいことにも立ち向かい、最後までやり遂げることで自己実現を目指すことができると考える。様々な情報を取捨選択しながら的確に判断し、粘り強く相互に理解し合い、ともに生きていくことができる道を探っていくことが極めて大切となる。

そこで、全国連合小学校長会研究主題を受け、副主題を「夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び 未来を生き抜く力を育成する学校経営」と設定した。そして、全連小大会・東陸連小大会における13分科会を、福井県の学校数等より、下記のような福井型8分科会に編成して校長の役割を究明していく。

- | | | | |
|----------|------------|------------|-----------|
| (1) 学校経営 | (2) 知性・創造性 | (3) 人間性・健康 | (4) 人材育成 |
| (5) 危機管理 | (6) 社会形成能力 | (7) 自立と共生 | (8) 連携・協働 |

これまでの福井県における研究・実践の積み重ねを基にして、教育普遍的使命や新しい時代の要請に応え、未来をたくましく生き抜く子どもの育成を目指した学校教育の創造と推進に努めていかなければならない。

3 主 催 福井県小学校長会

4 後 援 福井県教育委員会
敦賀市 美浜町 敦賀市教育委員会 美浜町教育委員会

5 日 時 令和6年8月20日（火）13時30分 開会

6 会 場 全体会 プラザ萬象
敦賀市東洋町1-1 TEL（0770）22-9711
分科会 プラザ萬象
敦賀市生涯学習センター
敦賀市東洋町1-1 TEL（0770）25-8318
敦賀市立図書館
敦賀市東洋町2-1 TEL（0770）22-1868

7 日 程

時 刻	12：30～ 13：00	13：00～ 13：30	13：30～ 14：00	14：00～ 14：20	14：20～ 16：20
内 容	打 合 せ 会 〔運営委員 司会者 提案者 記録者〕	受 付	開 会 式 (全体会)	移 動	分 科 会 (閉会式)
会 場	分科会会場	プラザ萬象 玄関ホール	プラザ萬象 大ホール	プラザ萬象 市立図書館 生涯学習センター	

8 開 会 式 (1) 国歌・新県民歌斉唱
(2) 挨拶 福井県小学校長会長 氣谷 達郎
(3) 来賓祝辞 福井県教育長 藤丸 伸和 様
敦賀市長 米澤 光治 様
(4) 来賓紹介

9 分科会

(1) 研究領域・研究課題・研究協議題・会場

分科会 研究領域	研究課題	研究の視点	会場
第1分科会 学校経営	創意と活力に 満ちた学校経営	(1)未来を見据えた魅力ある学校経営ビジョンの策 定と推進 (2)学校経営ビジョンの実現に向けた活力ある組織 づくりと学校運営 (3)学校教育の充実を図るための評価・改善の推進	プラザ萬象 小ホール
第2分科会 知性・創造性	知性・創造性を 育むカリキュラ ム・マネジメント の推進	(1)主体的・対話的で深い学びの実現に向けたカリ キュラム・マネジメント (2)知性・創造性を育む教育課程	プラザ萬象 第1会議室
第3分科会 人間性・健康	豊かな人間性や 健やかな体を育 む教育課程	(1)豊かな心を育成する教育課程のマネジメント (2)健やかな心身を育む教育課程のマネジメント	プラザ萬象 第2会議室
第4分科会 人材育成	学校の教育力を 高める研究・研 修とミドルリー ダーの育成	(1)学校の教育力を向上させる研究・研修の推進 (2)これからの学校を担うリーダーの育成	プラザ萬象 第3会議室
第5分科会 危機管理	子どもを取り巻 く様々な危機へ の対応	(1)自らの命を守る安全教育の推進 (2)危機管理能力の育成と未然防止に向けた組織体 制づくり	生涯学習 センター 第3研修室
第6分科会 社会形成能力	社会形成能力を 育む教育の推進	(1)社会の発展に貢献する資質や能力を培う教育活 動の推進 (2)地域に愛着をもち、よりよい社会の創造に貢献 する力を育むキャリア教育の推進	市立図書館 3階会議室
第7分科会 自立と共生	自立と共生の実 現に向けた教育 活動の推進	(1)子どもの自立や社会参加に向けた特別支援教育 の推進 (2)共に生きる社会の実現に向けた資質・能力を育 む教育の推進	市立図書館 3階研修室 西側
第8分科会 連携・協働	家庭や地域との 連携・協働と学 校段階等の接続 の推進	(1)家庭・地域等と連携・協働を深め、創意ある教 育活動を展開する学校づくりの推進 (2)学びの連続性を重視し、学校段階等間を円滑に 接続する組織的な取組の推進	市立図書館 3階研修室 東側

(2) 司会者・提案者・記録者・運営委員

分科会	研究課題	司会者	提案者	記録者	運営委員
1	学校経営	清明小学校 坪川 修一郎	六条小学校 藤木 隆之	清水西小学校 河村 英則	敦賀南小学校 藤岡 真也
2	知性・創造性	雄島小学校 佐藤 恭二	三国南小学校 矢部 正道	三国北小学校 佐藤 美紀代	角鹿小学校 岩崎 俊文
3	人間性・健康	長橋小学校 水上 真一	一乗小学校 宮本 正三	上文殊小学校 樺山 俊浩	沓見小学校 木下 達也
4	人材育成	加斗小学校 松井 恵子	内外海小学校 一瀬 泰史	野木小学校 竹田 ひとみ	敦賀西小学校 栗城 信市
5	危機管理	野向小学校 飯野 正樹	平泉寺小学校 白木 久子	阪谷小学校 芦原 邦弘	栗野南小学校 北川 佳邦
6	社会形成能力	美浜中央小学校 川畑 成央	美浜西小学校 前田 由美子	美浜東小学校 金井 清美	美浜中央小学校 川畑 成央
7	自立と共生	神山小学校 直井 恭子	服間小学校 上島 雅恵	白山小学校 麴 かおり	東浦小学校 鈴木 成吉
8	連携・協働	中河小学校 中村 利幸	鯖江東小学校 加藤 昌広 片上小学校 茨田 隆徳	中央小学校 竹中 由紀	栗野小学校 山岸 美穂

分科会主題別研究

I 研究の視点

学校は、教育活動について評価と改善を積み重ねながら教育活動の充実を図っていく必要がある。本校でも児童や保護者、関係者からの学校評価をもとにスクールプランに反映させて取り組んできた。しかし、これまでの経験上スクールプランは校長が立てていたため、一般の教員にとっては形式的であり馴染みのない目標になっていた。そこで、大谷翔平選手が花巻東高校時代に「目標達成表」としていたマンドラチャートを用いて、「ボトムアップ」「ベクトルをそろえる」をキーワードに、学校経営戦略の実践を行った。その実践概要および地区体育祭と校内体育大会の合同開催の実践について紹介する。

II 研究の概要

1 マンドラチャートを活用した取り組み

マンドラチャートは、中心のマスが達成したい目標、その周りに目標を達成するための8個の戦略、そしてその周りに具体的な戦術・取り組みが書かれている。昨年度末、学校評価の結果を受けて実践した。

昨年度12月末と1月末に戦略作成会議を開いて作成し、4月に入って新しいメンバーでさらに見直しをしてブラッシュアップした。校長は準備のみして、会議には参加せずボトムアップの形にすることで、教職員一人一人が学校全体を見る意識を高めることにつなげた。

中心のマスには校長が「本校に入学して（本校に勤務して）よかったと思える学校」の言葉を入れた。8個の戦略は教職員にアンケートを取って言葉を入れた。

完成後の教職員の感想には、「同じテーマで話すことで、働き方や指導に関しての新しい気付きが得られて楽しかった。」「マインドマップのよう思考が広がり、具体的に考えられると思った。」「対話しながらできたことで深まったりひらめいたり、その先生が大事にしていることが見えたりもしてよかった。」などがあつた。

2 家庭・地域・学校協議会を受けての取り組み

地域の体育祭と校内体育大会の合同開催を昨年度から実施している。校内体育大会の競技は児童が運営や進行、アナウンスをして、得点は校内の組ごとにする。地区体育祭の競技は地域の人が運営をし、得点は町別にする。

この合同開催は、保護者以外の地域の方にも子どもたちが主体となって活動する様子を見てもらう機会になった。また、大人の一生懸命な姿や大人同士が楽しんでいる姿、世代を越えて仲の良さそうな場面を子どもたちが見られたことは、地域を愛する心を育むことに確実に繋がったと思う。

体験活動の充実	キャリア教育の充実	挨拶、マナーの指導	一人一公開授業 授業研究会	ドリル学習	基本的な学力の定着	チャレンジタイムの活用	残食ゼロ	体育、体育的行事の充実
多様性への対応	豊かな人間性	異学年交流	共通の学習ルール	確かな学力	帯活動の充実	生活習慣（早起き朝食）	健やかな心と体	いじめの早期発見 早期対応
人権教育の推進	チャレンジ精神 前向き	季節の行事	読書	教材研究	学びを深める	温かい指導 言葉掛け	命の教育	レジリエンス ポジティブ教育
ノー残業デー （定時退勤）の徹底	施設・設備の充実	業務推進日の増設	豊かな人間性	確かな学力	健やかな心と体	興味・関心を引き出す授業	児童も教師も楽しむ授業	ふるさと（六条）の学習
4時～終礼	働きやすい職場環境	ごみ、汚れゼロ	働きやすい職場環境	この学校（職場）で良かったと思える学校	主体性の育成	子どもが活動を決める児童会活動	主体性の育成	総合的な学習の充実
休みが取りやすい環境	行事、会議の精選	業務の効率化	チーム力の増強	表現力の育成	ICT	一人一人の活躍の場を作る	成功体験	ゴールの明確化
サックスガード	ベクトルを合わせる	プレス、ブロックの積極的活用	朝のスピーチ	集会や行事後の感想発表	グループ、ペアトーク	教員の研修	teamsの活用	オンライン授業の充実
教員自身の学び	チーム力の増強	レクリエーション	インタビュー活動	表現力の育成	語彙力の向上	デジタル障害について学ぶ	ICT	デジタルシナシズンシップ教育の充実
報・連・相の徹底	コミュニケーション	外部との連携	話の聞き方	表現方法の幅を認める	本の紹介	スマートルール	ロイノートの活用	タブレットの家庭学習

III まとめ

マンドラチャートの取り組みは、教員の間でも楽しい時間になったようで、他の会議で同じようなかたちで話し合いをする教員がいた。また、転入してきた教員には、大事にしたいことを言葉にすることや具体的な取り組みを話すことで学校の雰囲気が伝わりやすかったようだ。2つの実践は共にワクワクしながら進めることができた。発表の機会を与えられたことに感謝している。

◎研究協議内容

小林 スクールプランの数値目標の数値はどのように決めたのか。

発表者 経年変化を意識しているので具体的な項目はほとんど変えていない。前年度の数値が85%だったら今年度は90%にするなど、もう一歩がんばれる数値にしている。数値を決める際には話し合いはしていない。

牧野 今回のマンダラチャートを活用した取組は、学校評価や行事等の振り返りでも活用できると思った。具体的に何かに活用した事例があれば教えてほしい。

発表者 R6の振り返りで活用する予定である。加えてR7の4月にブラッシュアップをする予定である。ただ、マンダラチャートばかりだとマンネリ化するので、学校経営戦略として使っていきたい。

牧野 校内体育大会と地区体育祭の共催において、どのようなすり合わせや会議等を行ったかを教えてほしい。

発表者 コロナ禍の影響や役員の交替等にて、区内で流れを知っている人が少なかったので、思い切って学校が主導して進めた。

牧野 校内研究会等で、マンダラチャートの言葉等を利用して振り返り等ができると思った。

発表者 使ってみたいと思う。

竹林 組織力を高めるうえで何か具体的な取組や工夫を行ったならば教えてほしい。

発表者 校長から各担当に「中心となって取り組んでほしい」等とはあえて伝えていない。各担当がこのマンダラチャートの言葉等を意識して主体的に動いてくれた。

梶川 マンダラチャートの中心に、あえて学校教育目標とは別のものを入れたことの意図等を教えてほしい。

発表者 学校教育目標を中心に置くのも一つの方法だと思う。一方、学校教育目標を真ん中に置いてしまうと、児童への教育や指導に関する取組ばかりにならないかと思った。子ども・保護者・教員のウェルビーイング的なものを大事にしたいと考えたので、あえて学校教育目標を中心に入れなかった。また、教職員みなで「しゃべる過程（話し合う過程）」がとてもよかったことが、やってみて分かった。

岸崎 マンダラチャートの完成後、校長の想定外な言葉・意外な言葉はなかったか。また、8つキーワードを決めるとき、自校の特徴的なことをキーワードとして入れようとは考えなかったのか。

発表者 意外な言葉は特に無かった。思いの外、早く決めることができた。教職員が自分事として熱心に考えてくれたと思う。8つのキーワードに自校の特徴的なことを入れようとは考えなかった。福井市教育方針の言葉を利用した。

川口 地域の中で子どもたちが主体的に活動している姿が素晴らしいと感じた。目指すべき姿だと思った。地区体育祭以外で何かイベントを設けたり同様な姿が見られたりしたならば教えてほしい。

発表者 特段なものは無い。地区のふれあい祭りでゲーム担当や歌の披露などで活動していた。



◎グループ協議内容（Aグループの発表より）

- ・校長が子どもたちに育てたい資質・能力をしっかりと、それをスローガンにしたりキャッチフレーズにしたりするなど言葉にすることで、全教職員が共有することができ、みなで学校経営にあたることが大切である。
- ・何を大事にしたいのかを校長が一言で伝え、組織で動くことが大切である。
- ・子どもたちが社会に出たときに活躍できるように、小学校の6年間で育てようというビジョンを教職員みなで共有して取り組むことが大切である。その先頭を務めるのが校長であり、その際に校長の思いは譲らないということも重要である。
- ・管理目標作成の際、各教職員との対話を大切に、どの教職員も学校経営に参画しているという意識をもたせることが大事である。また、教職員のほうから「こうしたい」と提案が出てくるような面談にしていきたい。それを引き出すのが校長の役目である。

（文責：福井市清水西小学校 河村 英則）

I 研究の視点

県内の二番目の人口を有する坂井市であっても、少子高齢化・人口減少・地域コミュニティの弱体化などが大きな課題であり、教育活動を通じた将来の地域を担う人材育成が不可欠である。そのためには小学校時代から、地域を知り、地域に学び、地域に役立つような体験を通して、地域を愛する人間を育成していくことが肝要である。

坂井市は平成18年に坂井郡の中の四つの町が合併し誕生した経緯から、今も中学校区を一つのコミュニティとした活動が残っている。今年度より坂井市は、「坂井市の教育 SOE」を掲げ、市を挙げて教育の充実に取り組んでいる。その中の一つの柱となっている、「ふるさと教育」と「ポジティブ教育」を核とした、本校と三国中学校区での様々な取組について教職員の資質向上も狙った、校長の役割や責任について紹介する。

II 研究の概要

(1) ふるさと愛を育む授業 ～三国南学の推進～

三国中学校区では、各小学校がそれぞれにメインとなる活動を据えて、地域学習を行っている。三国南小学校では、「三国祭」という地域の伝統行事を柱とし、それに付随した地域学習と本校の歴史学習を組み込み、「三国南学」として全校で学びを深めている。1年生と2年生は生活科の中で、3～6年生は総合学習の中で、発達段階を踏みながら地域学習に取り組んでいる。

(2) ポジティブ教育の推進（三国中学校区）

三国中学校が抱えている問題を中学校区で共有し、その改善に向け同一歩調で取組を行っている。大きなテーマが「学力向上」と「不登校の未然防止」であった。学力向上ではそれぞれの学校の効果的な取組の紹介と、各校で「自主学習」の推進を図った。また不登校の未然防止について、令和5年度より中学校区内全小中学校で「ポジティブ教育」の取組を始めた。

(3) 校長会企画「三国大好き交流会」（三国中学校区）

三国の5つの小学校はほぼ全員が三国中学校に

進学する。三国中学校の現状はそのまま、小学校教育の在り方を問われているわけである。そこで、三国中学校区の5つの小学校6年生と三国中学校の3年生がそれぞれの学校の良さを紹介し合う「三国大好き交流会」を校長会が企画し、細案立案や運営全般にわたって校長会主導で行うことにした。

(4) 小小連携「担任者会」の実施

三国中学校区の5つの小学校は、単学級の学校が多く、どうしても各担任がそれぞれの学年のことを一人に対応することになる。そこで、中学校区の校長会の中で、情報共有の場を設けようということで、3年前から夏季休業中に担任者会を実施した。

III まとめ

(1) 成果

今回の実践(1)は、これまで行われた活動を、学年毎に整理し、縦の軸を通すことで、狙いとなることが明確化し学習の深まりを感じることができた。実践(2)に関しては、中学校区の校長会として歩調を合わせて行ったわけであるが、担任教師の思いとも合致し、意欲的に取り組む学級が増え、活動自体にも深まりが見えてきている。実践(4)は特に若手教員に好評で、とくにテーマを設定しなくても、自然と学校間を超えた教師同士の学び合いが生まれていった。

(2) 課題

実践(3)に関しては、新たな行事を創設したところが一番のネックとなった。内容的にも見応えがあり、参加した小学生たちにも好評で、とても有意義なものとなったが、発表を担当する6年生担任の多忙感を高めてしまった。いろいろと議論を重ねる中で、今年度からはやむを得ず中止とした。

また、コロナ禍でこれまで中断されていた学校行事や事業の復活を求める保護者や地域の声は多い。こうした声に対して真摯に向き合いながらも、校長としてその内容を精査した上で、しっかりと説明をした上で中止を決断することも求められてくると考える。

◎研究協議内容

佐々木 中学校が抱える問題の不登校が多いという現状を克服するために、小学校の取り組みの成果をどのように見ればよいのか。

発表者 小中連携で取り組んだポジティブ教育（認め合う仲間づくり・運動会に向けて・あたかい言葉がけ・よいところさがし等）において、自己肯定感が高まり、満足度が数値においても表れた。他者のことも感想に書く児童が多くなった。今年度の不登校生徒が実際に減っている傾向にあることから、一定の成果につながっていると言える。

森下 課題に挙げていた新たな行事「三国大好き交流会」を創設したことは、児童の満足度も高く、地域の評判も良かったが、教員の負担感につながったという点は、自校が近隣校と取り組んでいる5年生が参集型で発表をするふるさと教育においても、言えることかもしれない。地域に残る人口を増やす意味で実施しているが、スポーツ交流会に、どのようにして切り替えられたのか。



発表者 三国大好き交流会は、ほぼ同じ中学校へ進学する6年生が「各校の特色ある発表を共有しふるさと愛をさらに育むこと」と「交流すること」が目的であった。昨年度4年ぶりに再開した「陸上記録会」が様々なりリスクがあったため中止となり、本年度から交流目的で、「スポーツ交流会」の実施に変更されたことを機に、議論した上で中止とした。教員はつい舞台でより良いものを発表させたいという思いで時間や労力を費やしてしまうため負担軽減を重視した。

川端 発表から熱い思いが伝わってきた。自校の地区で行っていたふるさと学習交流会も10年間続けたが、課題が出てきたため取りやめた。大好き交流会など、身軽に中止にできたのはなぜか。プロセスも伺いたい。

発表者 ざっくばらんに話せる中学校区の校長会が企画した「大好き交流会」だったため、取りやめるときも最終的に校長会で決められた。「担任者会」も校長会の企画。やってみることで、教員自身がやりたいと思えることは続く。無理をさせないということも大切である。

◎グループ協議内容

- A・目指す子ども像と教員の思いを活かし、地域の神事への参加や貢献活動を子どもたちに考えさせ、任せて行かせたところ、実に楽しそうである。
- ・やりたいことの自由度を与えると子どもも教員も創造性が高められ、意欲的になる。チーム担任制を導入し、ペアで入れ替わって学級運営にあたり、OJTを進めているが、同僚性も高まっている。
- B・教職大学院に積極的なサポートメンバーの先生がおられ、依頼をしたところ、交通費無しで、学びたいという若手教員に授業づくりや環境整備など、多岐にわたる指導や助言をいただく機会が得られた。
- ・ポジティブ教育は、研究所の担当課の協力を得た。指導内容がセットになっていて、手立てとして教員に示せるのがよい。中学校区で取り組むと効果も大きい。ストレスマネジメント教育でも対処していたが、ぜひ取り入れたい。
- C・行事は子どもたちの活躍の場であるが、教員の負担になる場合が多い。どんな力をつけさせたいのか原点、目的に立ち戻ると判断しやすい。
- ・校長の支配型リーダーシップは危機のときのみ。支援型がよいのではないかと。きちんとすべき部分と緩くする部分をしっかり決めておく、教員の主体性に任せる部分を残しておくことが大切ではないか。
- D・地域の豊富なゲストティーチャーを活かし、ふるさと学習を進めて校外での発表の機会もつくっている。
- ・学校が海に面していることを活用して、生活科や総合的な学習の時間にふるさと学習を進めている。
- ・150周年記念事業は地域が主体となって実施した。人口減少が続くことについては学校が頑張っても難しい課題である。

（文責：坂井市立三国北小学校 佐藤 美紀代）

研究課題 豊かな人間性や健やかな体を育む教育課程

研究発表題 地域等連携を通して、人間性豊かに、たくましく生きる子を育成する教育課程の工夫

福井市一乗小学校長 宮本 正三

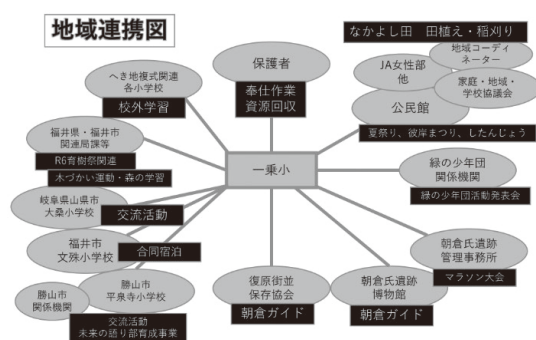
Ⅰ 研究の視点

児童数減、教職員減の状況の中、学校教育目標にある子どもの育成をどのように行っていくかを考えたとき、一乗地区の地域性、歴史的資源、保護者や地域、様々な関係機関との連携を活かした教育活動を推進し、地域等連携を重視した教育課程を工夫することが大切であると考えた。さらに、本校が抱える今後の課題等にも対応すべく、進めている実践についても述べる。

Ⅱ 研究の概要

(1) 地域等連携におけるこれまでの取組

地域連携図（別図）にあるように様々なつながりが見られるが、大きく分けて5つのつながりがある。①保護者や地域等、②朝倉氏遺跡関連、③緑の少年団関連、④全国育樹祭関連、⑤学校間交流、の地域等連携活動に現在は取り組んでいる。一乗小児童はこれらの様々なつながりの中で育まれている。



(2) 学校の小規模化に伴う変革

これらの地域等連携活動を維持しつつ、今後の児童数減を見越した、持続可能な教育活動の推進のために、教育課程の見直しや工夫が急務であると考えた。今後は更なる児童数減も予想され、将来を見据えた学校教育の変革を始めている。

① 児童の育成

全体の児童数が減ってきたとき、今の教育が維持できるかは不安である。児童一人一人の力を今以上に付ける必要があると感じる。学校教育目標にある子の育成について、学校評価を用

いて徹底的に分析するとともに、福井市学校教育方針の取組を活用し、目標の達成度について検証を続けている。

② 子の育成を支える教育課程の編成

本校は開校150年を過ぎているが、その長い歴史の中で常に地域やその他の関係機関と関わりながら教育活動を進めてきている。

今も、そして今後も教育課程の工夫が必須になるが、令和4年度より始めた本校独自のカリキュラム・マネジメントを、昨年度末も連携活動と教科等の年間指導計画における結びつきにおいて見直しを行った。今後も各教科等の教育内容を相互の関係で捉え、学校教育目標を踏まえた教科等横断的な視点で、教育内容の組織的配列を工夫していく。

③ 教職員の考え方の変革

5年後、10年後、さらには、それ以上先の学校の姿を見越して、現在行っている見直しを継続して進めていく強い意志をもつことが大切である。先を見越して考えることで、改革の一步は踏み出しやすく、力強いものになる。

Ⅲ まとめ

(1) 成果

目標をもって教育課程を見直ししたり、編成を工夫したりすることで、これまで行ってきた教育活動全体を振り返ることになり、本校が長きにわたって取り組んできた教育の良い点や大切さ、また、今後の課題等が明確になった。

(2) 課題

校長一人の思いだけでは様々な変革を進めることはできない。子どもたちの成長を全教職員で見取りながら、目標とする子の育成を第一に考えて、様々な取組を進めていきたい。

(3) これからの学校経営

将来の学校の姿を見据えて、校長が自ら考え実行していくことが必要である。自校の子どもたちにとって最も必要な教育を推進できる環境を整えることが校長には求められる。

◎研究協議内容

山岸 岐阜県の大桑小との交流の内容について教えてほしい。

発表者 隔年でお互いに修学旅行の中で訪問して交流している。元々は岐阜県の土岐市と朝倉遺跡につながりがあることから始まっている。お互いに児童数減等の課題があり、今年度で、一旦終了の予定。

上北 行事に地区体育祭と校内体育大会が書かれているが、別々に開催しているのか教えてほしい。

発表者 校内体育大会は小学校だけで行い、地区体育祭は授業日として合同開催をしていた。しかし、この時期、週末に授業日として児童が参加すると、スポ少の活動に支障があると保護者から強い要望があり、コロナ明けから、地区体育祭は学校と切り離して実施している。

長谷川 多くの行事を抱える中で、学校、保護者、地域のパワーバランスに問題がないか教えてほしい。

発表者 保護者や地域にとっては当たり前の事となっており、特に強い圧を感じることはない。本校の記録によれば、過去に本校に赴任した教職員それぞれが、一生懸命に取り組み、管理職がセーブしなければならないことも度々あったようだ。

三宅 朝倉ガイドの取組はすばらしい。これをメインに据え、児童数減に伴う見直しや精選の中で、地域の指導者が不在となりつつある田植えや稲刈り活動は、やめてもよいのではないかな。

発表者 2月に保護者会を開き、公民館運営審議会でも説明をして、平成9年から続いていた戦国絵巻という楽曲の発表を今年度で最後とした。保護者や地域の理解もあり、今のところ特にクレーム等はない。

平田 学校評価項目の「すすんであいさつ」の保護者評価と児童評価の差がかなり大きいのが、要因の分析はされているのか教えてほしい。

発表者 A評価のみを数値化しているため差が大きい。全体的に保護者の評価は低い傾向にある。まずは教職員評価が100%となるのが先だと考えている。家庭・地域・学校協議会では、保護者の責任ではないのかという意見も出ていた。

石丸 今の児童のために、過去や未来のことを見据えて取り組んでいることがすばらしいと感じた。児童が主体的に「やりたい」と思うことに関しては、どのように捉えているか教えてほしい。



発表者 行事の精選等については、教職員や保護者、地域の理解が必要だが、児童の気持ちを抜きには考えられない。最終的には児童がどのように受け止めるかが大切だと考えている。

◎グループ協議内容

- A・変革をしたくても、地域との折り合いをつけるのが難しい。一乗小の児童の自己肯定感が高いのは、朝倉ガイドのカリキュラムによる成果ではないか。
 - ・教職員や児童の負担減+教育効果増+地域連携を踏まえ、校長として動くことが必要。
 - ・いかに地域の財産を大切にしていけるかがカギ。
 - ・地域の間に入って、頭を下げるのが校長の役目だが、地域活動と児童の主体性のバランスが難しい。
 - ・児童、教員、保護者数が少ないため、学校評価の数値はあまり気にしない。
 - ・ボランティアを募るなど、地域を大事にし、うまくやっていくのが校長のマネジメント。
- B・児童数減により、特に体育大会の在り方について、児童の主体性と達成感を重視して検討中。
 - ・越前市では、午前中に校内体育大会、午後に地区体育祭として行うところもある。延期がないよう、公共の体育館で実施する学校もある。
 - ・児童主体で運営ができるか、どこまで教員が介入するかが気になる点。
 - ・半日開催に対して保護者から不満の声もある。
 - ・清掃場所を限定したり、委員会の数を減らしたりして、児童数減に対応している。
 - ・行事の見直しには、教職員の年齢構成に対する配慮も必要となる。
- C・学校評価は学期ごとに実施し、児童に結果を返していくことが大切。
 - ・学校教育目標をシンプルにし、前年踏襲の見直しを進めていく。
 - ・外国籍の児童など、多様な児童に自己肯定感や豊かな心を育てるには、学校を取り巻く環境が重要。
 - ・教員の児童に対する見方を変えていく。授業や行事など、取組みの内容、教員の考えなどを引き出し、「みんなと学ぶ」場を多く設定する。
 - ・校長主導より、教職員からの発案を促す。
 - ・取組を他の教職員に広めてもらう。
- D・各教職員の業務が、いつ忙しさを洗い出して、教職員の業務量を把握するようにしたい。
 - ・地域は学校に大きな期待をしているが、地域産業の後継者が減り、地域と連携した活動が継続できるか気がかりなところもある。
 - ・地域の紹介など、児童よりも地域をよく知っている方がした方がよい。結局は、教職員がルールを敷いての活動になってしまう。
 - ・行事は保護者や地域の楽しみになっているが、そのための教員の労力を考えるべき。行事化せず、学習の中で深めていくことが大事。
 - ・当たり前を、当たり前ではないという考えで話し合いを重視することが必要ではないか。

(文責：福井市上文殊小学校 樺山 俊浩)

I 研究の視点

小浜市では多額の公費を用い、統合型校務支援システム C4th（以下 C4th）を導入したが、市内各小中学校で十分な活用がなされていないとの指摘がなされていた。このような指摘を受け、令和5年度、C4th をさらに活用するために、小浜市小中学校校長学校運営研究会が中心となり、タスクフォース（特別作業班）として、小浜市小中学校 C4th 活用推進委員会を立ち上げた。推進委員メンバーとして、校長、教頭、教務、事務職、教育委員会のそれぞれから担当者を選出し、管理者、管理職、実務者のそれぞれの立場から有用なあり方を検討し、業務改善に向けて活用を推進してきた。

この一連の活動を通じて各職が連携・協力し、業務改善につなげるとともに、組織マネジメント力やコミュニケーション力、問題解決力等を備えた、小浜市の次世代を担うミドルリーダーを育成したいと考えた。

II 研究の概要

（1）活用推進委員会の設置

小浜市校長学校運営研究会において、さらなる C4th 有効活用に向けて、研究会会長・副会長より提案がなされ、活用推進委員会の立ち上げを行った。推進委員メンバーとしては、校長会3名、教頭会2名、教務部会2名、事務部会2名、小浜市教育委員会2名で構成することとし、研究会会長・副会長が中心となり人選を行った。人選に当たっては、C4th 活用の実務経験や情報活用能力等を重視した。

（2）第1回活用推進委員会の運営

近隣他町の C4th 活用状況を知り、小浜市としての課題をまとめ、どのような活用を行うかを検討し、活用についての論点を絞り込んだ。絞り込んだ論点は、それぞれの部会（教頭会・学校事務部会・

教務主任会）で話し合い、意見集約することとした。校長会担当により、論点を整理し、各担当へメール配信を行った。

（3）各部会の運営

第1回活用推進委員会でまとめられた論点について、部会毎に推進委員がリーダーとなり検討し、業務改善につながる運用について考えた。意見集約したものは、活用推進委員会に報告された。

（4）第2回活用推進委員会の運営

前回の委員会・部会での話し合いを受け、各職からの意見を出し合った。出された意見をもとに、校長会担当により論点を5つに絞り込み、具体的な運用に向けての試行案を作成した。

（5）第3回活用推進委員会（研修会）の運営

第2回活用推進委員会で出された施行案の検証を行った。実際に C4th を操作しながら、機能の確認や操作方法、運用方法について確認し合った。

（6）校長学校運営研究会での決定

試行案について校長運営研究会で諮り、小浜市教育委員会の指導の下、実施することとした。

III まとめ

C4th 有効活用に向けたタスクフォースの活動の中で、業務改善に向けての具体的な動きがつけられたこと、メンバーそれぞれが全体の事を考え、互いに協力・刺激し合い、各職のリーダーとして動いたことは、ミドルリーダーの育成として成果があったと考えている。

令和6年度は教育委員会が主体となり、学校 DX 推進に向けて全市を挙げて取り組んでおり、新たな組織での活動となっている。前年度の取組の経験を生かしながら更なる人材育成を図っていきたい。

◎研究協議内容

明石 研究を始めるきっかけがC4thの十分な活用がなされていないという教育委員会からの指摘であることから、推進委員にやらされ感があったのではないかと。推進委員にモチベーションを持たせそれを維持させるためにどのようなことを行ったか。

発表者 C4thが未知のものであったため、新しいものを皆で作っていき、新しいことに挑戦していくという意識が、推進委員のモチベーションになった。また、業務改善等につながる新しい気づきもモチベーションとなった。

濱野 推進委員会での取組を各校に広めるために事務職も含め、中心となる職員をどのように育てていったか。

加藤 推進委員がいない学校ではどのように進めていったか。

発表者 今回は各校というより、タスクフォース（特別作業班）として立ち上げた活用推進委員会というチームに力をつけることに重点を置いた。校長、教頭、教務、事務という各職の部会で推進委員が中心となりC4thの活用を進めてきた。市全体で各部会のリーダーとなる人材を育成することに力を入れた。

市橋 本研究を教員の協働的な学びの一つであると受け取ったが、ここで終わるとミドルリーダーの育成にはつながらないと思う。活用推進委員会での学びを各委員がどう生かしていくかという意識づけが大切だと考える。次の段階として、活用推進委員会での取組を全体に広げていくという意味で何か考えていることはあるか。

発表者 事務部会がC4thを活用している近隣他町への視察を計画している。このような部会での積極的な取組が各校に良い影響を与え、ミドルリーダーの育成につながると期待している。



◎グループ協議内容

- A・ミドルリーダーになってほしい年代の職員が少ない小規模校や主任等を年長者とするこれまでの慣習を変え始めようとしている学校がある。世代交代をすることによって、新しい気づきや学びが生まれている。
 - ・校長として管理職をめざす職員を育てることが重要であるが、年々難しくなっており、その役割が十分に果たせていない。
- B・職員に何かを任せて、それをやり遂げることで力がつくと考える。これこそが人材育成であり、職員にいろいろな経験をさせ、職員自らが自身の経験を次にどう生かすかを考えることが大切だと思う。
 - ・職員に任せることは大切であるが、誰に任せるかは校長裁量である。職員の強みを生かして、いかに適材適所に職員を配置するかが校長の力量である。
 - ・これからの学校を担うリーダーを育成するために、学年や校務分掌など、職員が新しいことに挑戦したり、いろいろな経験をしたりすることができる人事を考えることが校長の役割である。
- C・C4thの有効活用だけを考えると、職種別の講習会を開催する方が効果的かもしれないが、今回の取組は各職種における職員の資質・能力を生かすことができる組織づくりという点では効果があると思う。
 - ・これまで活躍の機会が少なかった職員を得意分野であるICT担当に抜擢したことにより、生き生きと取り組み、他の職員からの信頼と承認を得て、自信と力をつけた事例から、リーダーの育成には校長による職員の適材適所への配置と動機づけが重要であり、校長の役割が大きい。
- D・ミドルリーダーの育成は、校長のリーダーシップとリンクしている。ミドルリーダーとして期待する職員を校長の理想に近づけていくために、職員と話す（考えを伝え合う）機会を持っている。
 - ・職員数や学校規模を考えると、全職員がミドルリーダーとして力を発揮してもらいたい。
 - ・事務職の役割が大きくなってきているが、職員全体への広がりが少ないことが悩みである。

（文責：若狭町立野木小学校 竹田 ひとみ）

I 研究の視点

勝山市では、近年豪雨や大雪により緊急対応を求められることがあった。また、令和6年元日には、能登半島地震による緊急対応があり、新学期開始時、長期休業中、学校閉庁中など様々な場面での対応があった。子どもたちがどのような環境下で災害を経験するかにもよるが、管理職としてその対応は、確実に増加している。

過去の県内の災害時を見ても、福井豪雨の時は九頭竜川での被害は大きくなく、古くは福井地震の時も勝山市内での被害はほとんどなかった。このことから、雨でも地震でも大きな災害はほほないだろう、と考えられていた。ただ、雪だけは違っており、古くは昭和56年の豪雪時には、屋根の高さを歩くような状態で、3学期が始められなかったことが思い出されるが、この先もっと対応に苦慮する場面もあることは予想される。

管理職として、タイミングを逃さないことと足並みがそろうことを重視して、最近の状況をまとめてよりよい対応を検証していく。

II 研究の概要

(1) 令和3年1月8日～11日 大雪の場合

① 緊急対応

- ・10日の成人式延期も踏まえて、前日から11日は臨時休業決定の連絡あり。各校から緊急メールで各家庭に連絡。

② 情報共有

- ・出勤しにくい状況もあり時間差が生じる。

(2) 令和4年8月4日 豪雨の場合

① 緊急対応

- ・校区内の河川では、河岸崩壊被害などがあり、警戒のため緊急連絡発出。
- ・出勤の教員について、早急に帰宅の指示。
- ・児童館等は担当課との間で相談・判断。

② 情報共有

- ・後日メールで自宅等の被害報告を依頼。
- ・被害があった児童らへの家庭訪問。

(3) 令和5年7月13日 豪雨の場合

① 緊急対応

- ・前日から大雨警報。翌日の対応と、早朝市教委からの連絡で当日の臨時休業を連絡アプリにて発出。
- ・学校によってはブログも活用して告知。

(4) 令和5年12月21～22日 大雪の場合

① 緊急対応

- ・小学校は下校時教員が付き添い下校指導。

② 情報共有

- ・前日に翌朝連絡を発出。それぞれ通常登校で遅れてもよい旨を連絡アプリにて発出。

(5) 令和6年1月1日 大地震の場合

① 緊急対応

- ・校長会長メッセージアプリ型SNSで学校の状況確認の依頼（市教委より）があり、管理職は各学校を確認。

② 情報共有

- ・翌日は市教委が巡回。異常があれば連絡。

III まとめ

(1) 成果

近年、校長会としてメッセージアプリ型SNSでグループを作り、何事においても早急に対応できるようにしている。校内においても元日のような時には、教職員の所在と安否確認が最優先で、その後の対応を早急に考えるようにしている。

(2) 課題

災害時、どんな状況であっても連絡や指示のタイミングを逃すことで、二次災害の危険も考えられる。校長として最善の判断を行えるよう、小さな事例であっても情報共有して検証していくことが大切である。

また、教頭との連携や長期休業中等の役割分担についても、確認することが重要である。

◎研究協議内容

正玄 自然災害の中で学校独自に対応を判断したこと、市全体で判断されたことをそれぞれ教えてほしい。

発表者 臨時休業は市教委が決定。学校独自に判断したのは、登下校に関する連絡など保護者に委ねる部分。各学校で下校方法が違うこともあり、学校では判断しづらいことから保護者に判断していただいている。

正玄 臨時休業の判断について、福井市では中学校区や近隣の学校で話し合っただけで判断することがあるが、勝山市は市教委の指示待ちということなのか。

発表者 基本、市教委の指示待ちだが、災害の状況が校区によって違うので、それぞれの学校で判断を任される場合もあった。

松原 平泉寺小学校児童の熊への対応が素晴らしいと思うが、学校で何か訓練をされたのか。誰か講師を招くなどしたのか。自校でも、登校時は見守りの方がいるが、下校時は子どもだけなので、実際に正しく対応できるのか心配である。

発表者 学校では特に訓練をしていなかったのですが、職員も驚いている。その子は普段からいろいろと学んだり、周りの子に教えたりしている子なので、適切な言葉が出たのだと思う。熊が出没しているニュースを自分の身近なことや自分事として話が聞けるかどうかの違いだと思うので、とっさの時に自分で判断できるように話をし続けなければならないと感じている。

正玄 自分事として災害についてどう捉えさせるのが難しく困っている。避難訓練や講習会をした際も、自分事と捉えていない子が多く、ただ訓練を受けたという経験だけで終わっている現状がある。子どもたちが自分事として捉えられる手立てや指導について悩んでいる。

発表者 事前に職員にも児童にも知らせない中でJアラートの訓練をした際、担任の指示がなくても、子どもたちは自分の判断で机の下に入って静かにじっとしていた。体育館の子どもたちも真ん中に集まっていた。

小さい学校なので、身に付いているのだと考える。

佐藤 本校でも事前の予告をせずに避難訓練を行った。いつ起こるか分からない状況での訓練を経験させるのは大事なことで、自分事として考える機会になった。

松原 過去の美山の災害の紹介を教頭が行い、垂直避難の必要性を訴えた。経験と知識を結びつけることが重要だと感じた。

◎グループ協議内容

A・自らの命を守る安全教育の推進について、「聞け」「見ろ」がばんやりしている。避難訓練は行っているが、しっかりとつながってほしい。

- ・休み時間に抜き打ちの避難訓練を行うことで、子どもたちが自分で考える状況を作っている。
- ・自然災害への対応はきりが無い。人格形成の時期は基本的なことを何度もやることで、受け入れ、身に付いていくものだと考える。
- B**・子どもたちが自分事として考え、知識を身につけられるよう話をしている。予告なしの避難訓練を行っているが真剣さが足りないように感じる。自分事でできる子どもの育成は重要なことである。
- ・地震時に学校が避難所になった場合の対応マニュアルが必要である。土砂災害などへの備えとして、小4～中2で防災教育を実施している。地域で系統立てて取り組んでいる。
- ・SNSが寸断されると緊急メールが出せないことから、さまざまな連絡ツールの準備が必要である。
有線放送や防災無線を活用している地域もある。
- C**・学校の近くで熊が出没した。学校だけでの対応は難しく、地域を巻き込んでいく必要がある。熊鈴の配布、見守りボランティアとの連携など、町全体が危機意識を持つことが大切である。
- ・職員や子どもたちに予告をしないで避難訓練を実施した。子どもたちはしっかりと動けたのだが、教師が指示を出せなかったり、動けなかったりした。
- ・校長不在時に不審者対応訓練を実施し、自分で考えて動く自走する組織作りにつなげている。
- D**・能登半島地震では、職員の安否確認や避難所開設時で市職員との連携が必要だった。
- ・休校を各学校で判断した場合、前日の予告メールで対応しているが、保護者の苦情が心配される。
- ・平日頃から話を聞く姿勢が大切。子どもたちは、熊が近くに住んでいるなど距離感が近いこともあり、熊に対して興味を持っていた。



(文責：大野市阪谷小学校 芦原 邦弘)

研究課題 社会形成能力を育む教育の推進

研究発表題 探究的な「ふるさと学習」の中で「対話」を通して育む 資質・能力の育成

美浜町立美浜西小学校長 前田 由美子

Ⅰ 研究の視点

今年度、学校教育目標を新しくした。「未来を生きる子の育成～予測困難な時代を生きるための力と心を育てる～」である。未来を生きていくための力として、「社会形成能力」は不可欠な力の一つである。その「社会形成能力」とは、「多様な他者の考えや立場を理解し、相手の意見を聴いて自分の考えを正確に伝えることができる」とともに、自分の置かれている状況を受け止め、役割を果たしつつ他者と協力・協働して社会に参画し、今後の社会を積極的に形成することができる力」と捉える。

そのような力を育むために必要なことは、まず、それぞれの場面において、その場面で必要な相手と「対話」していけることだと考えた。各教科、道徳、特別活動、その他の教育活動など、学校教育活動の中で、「対話」を仕組む機会は多数ある。その中で、今回は「ふるさと学習（総合的な学習の時間）」において取り組んできたことを中心に紹介したい。

Ⅱ 研究の概要

(1) 「ふるさと美浜元気プロジェクト」について
～総合主任が主体的に動く取組～

本校が所在する美浜町には、3つの小学校がある。「3つしかない」ということを強みと捉え、横のつながりを生かして、総合的な学習の時間（以下、「総合」）において、「ふるさと美浜元気プロジェクト」という取組を行っている。各学年一つのテーマをもち、3校同一カリキュラムに沿って探究学習を行うという取組である。

1年を通した探究サイクルの「まとめ・発信」の場として、保護者や地域の方たち、助言をもらった中高生、町の行政に携わる方たちを招いた「ふるさと美浜元気フォーラム」を3学期に設定し、そこでの発表を一つのゴールとして、1年間取り組んでいる。このプロジェクトは、各校の「総合」主任を中心に進めており、各学年リーダーを定め横のつながりを常に持ちつつ、各校の独自性も大切にしている。

(2) 「対話」について

一連の学習活動の中で、いろいろな「対話」が設定できる。児童の対話の対象として、①教師 ②児童同士 ③地域の方 ④中学生・高校生 ⑤自分自身 などが考えられる。また、児童がより有意義な学習を行えるためには、事前・事後の⑥教師同士の対話も不可欠である。同じ学年の教員同士が、年間10回ほど話ができる機会をもった。

さらに、「対話力の育成」をスクールプランにおける「重点目標」の一つとし、「学校評価」にて、児童・保護者・教職員それぞれに評価を求め、結果を次年度に生かすようにしている。

Ⅲ まとめ

(1) 成果

- ① 総合の「対話」で培われた資質・能力が、他の場面でも生かされている。→「社会形成能力」育成へ
- ② 様々な方・機関との「対話」によって、つながり・連携が図られたことにより、学びへの広がり深まりが生まれた。
- ③ ①②を通し、児童・教員の意欲の向上、ふるさとへの理解・愛郷心につながっている。

(2) 課題

- ① 初めて総合を受け持つ教員への支援
- ② 有限な時間の中で、いかに有益な取組ができるかを考えたカリキュラムマネジメント

教職員がやる気を持って、やりたいことをやれる環境づくりを行い、一人一人が強みを発揮できるようにすることが、管理職としての重要な役割の一つだと感じている。今後も、教職員や児童が主体的に伸び伸びと取り組み、必要な資質・能力が育まれることをねらい、校長としてのさらなる役割を模索していきたい。

◎研究協議内容

早川 「ふるさと美浜元気プロジェクト」を年々ブラッシュアップして実施されたそうだが、町教委と校長会では、どのような話し合いをしたのか。

発表者 取組の詳しい内容は、町教委と校長会のやりとりではなく、総合担当教員と町担当職員との話し合いで進めている。町教委には、総合担当の校長が窓口となり総合部会で話し合った内容を伝えている。

早川 町主導ではなく、教員からのボトムアップで実現したことが分かった。

中村 3校の規模と課題設定から発表に至るまでの流れを教えてください。

発表者 規模はどの学校も100人程度で、全て単学級である。例えば昨年度の5年生は、4月は地域のよさを見つけ、5・6月で情報収集・整理・分析、7月に自分たちにできることを考え、9～11月で実践、12月にまとめ、1月に発表という流れであった。

有島 この子どもたちは中学校や高校でどんな力がついているのか、発揮できている事例を教えてください。

発表者 6年生の時に、違う学校の子どもたちと共に学んでいることで、中学校でも入学してすぐに話し合いができ、対話がスムーズにできている。



斎藤 ①違う学校が同時に学ぶためのバス手配等について②先生方の横のつながりについて教えてください。

発表者 ①ほぼオンライン学習だが、最初と最後は原則参集型である。参集時のバス手配は、町に依頼している。②月に1回程度、「人権研」という同学年教員が集まる時間がある。その後の自主研修で、総合等についても気軽に相談し合っている。ラインワークスを活用し、スピード感をもった相談もできる。

堤 教員の負担感によるマイナス面の声はないのか。

発表者 経験の浅い教員が負担に感じることは当然あると思うが、個に任せず町で同じカリキュラムで実践したり、毎月の集まりで悩みを解決できたりすることで安心感がある。しかし、教

員の様子には、管理職は常にアンテナを張っておく必要がある。

内田 学年毎のテーマはどのように設定しているか。

発表者 各学年の教員で、昨年度の反省を踏まえて今年度のテーマを話し合った後、3～6年のリーダーが集まり、学年間のバランスも考えて決定している。

中谷 3校合同で取り組む中で地域性や周りの環境が大きく関わってくると思うが、各学校の地域性や地域の宝等、各学校独自で取り組むことはあったのか。

発表者 大きなテーマは同じであるが、探究するものは学校によって違い、各学校独自で取り組んでいる。

◎グループ協議内容

A・先生方の横のつながりは大切であり、特に単学級の学校ほど小連携を進めていく必要があると感じている。月に一度、同学年の教員が参集する取組は、担任同士の交流を深めることで、教員の負担感を軽減することにもつながっているのではないかと。

・ふるさと学習において、町で総合的な学習のカリキュラムを作成し、共通テーマのもと各校の独自性を出しながら実践していく点を見習っていききたい。

B・地域の方に学校での取組を発信することで、地域の理解が得られている。地域での発表会が伝統的に続いている地域もあり、子どもの成長や地域の活性化にもつながっている。

・地域との距離感をいかに保つかが課題である。地域の方の地域を盛り上げたいという気持ちも尊重しつつ、教員が負担感を持ちすぎない取り組み方も考えていかなければならない。持続可能な活動、次年度の活動も見据えた取組を考えていく必要がある。

C・総合的な学習の時間で、「つきたい力」を明確にし、焦点化していくことが大切である。探究の仕方をどう学び、どんな力をつけていくかを考えていきたい。

・管理職は、小中高の縦のつながりや中学校区内小学校の横のつながりを深めていくことが重要である。中・高校生から探究の仕方やまとめ方を学んでいる学校もある。管理職のコーディネート力が問われる。

D・中学校区で、他校の活動を知る場を校長会で設定している地域がある。その取組が中学校での探究を深め、高校へとつながっていく。また、YouTubeを活用し、中学校の発表をそれぞれの校下の小学生が見たり、校区内の小学校がお互いの発表を見合ったりできるようにしている地域もある。

(文責：美浜町立美浜東小学校長 金井 清美)

I 研究の視点

これからの子どもたちは多様な人々と協働しながら様々な社会変化を乗り越え、共生社会をつくりていかなければならない。越前市では、市教育方針の一つ目として、「生命を尊び生きる喜びをもって、いかなる人とも等しく心を分かち合える人を育てる」を掲げ、人間力を高める教育の充実を図っている。

そこで、以下の3つの観点で、他者と協働する資質・能力を育む教育活動を推進していく。

- 自立した人間として他者と共によりよく生きるための基礎となる道徳性を養ったり、自他の生命を尊重する態度を育む学習環境づくりを行ったりする。
- いかなる人とも等しく心を分かち合う人権意識を高める教育を推進する。
- 多様な人と協働するコミュニケーション力の育成を行う。

ここでは、職員への周知及び児童への意識付け、校内組織のマネジメント、関係機関との連携において、校長の役割を考えていきたい。

II 研究の概要

(1) カリキュラムマネジメントの確立

スクールプランについて各分掌部員を集めて項目を検討し、教職員に参画意識をもたせる学校運営になるようにした。そのうえで、カリキュラムマネジメントを行った。

教職員のベクトルの向きをそろえ、スクールプランの実現に向けて協働を図れるようにした。

(2) 自分のよさや可能性を認識する取組

① 互いのよさを認め合う活動

- ・縦割り集会
 - 2ヶ月に1回、児童会・6年生中心で企画
- ・月目標と連動した人権週間
 - 「月めあて」の振り返り
 - 「人権チェックシート」と連動した人権宣言
 - 「ふくまっ子のよいところ探し」

子どもたちが、自己肯定感・自己有用感を高める活動を教師が意図的にリードし支援できるよう、ミドルリーダーの育成を行ったり、協働する喜びを実感できるような仕組みを作ったりした。

- ② 「公正、公平、社会正義」「国際理解、国際親善」「相互理解、寛容」道徳教育推進
 - ・学校公開日に道徳の授業を必ず公開する。
 - ・道徳便りの発行（年3回）

道徳の時間を活かしながら人権教育を進め、お互いに理解を深め相手を思いやる心を育てる。

(3) 地域の中で多様な人々と協働する取組

- ① 障害のある人との共生
 - ・4年生：車椅子・アイマスク・高齢者体験
- ② 高齢者との共生
 - ・4年生：高齢者施設「メゾン今立」との交流
 - ・4年生：公民館主催高齢者体力測定の参加
- ③ 自然との共生
 - ・各学年 米・大豆・野菜づくり
- ④ 地元大学生との協働
- ⑤ 外国人との共生
 - ・市内児童生徒とのオンラインによる交流
- ⑥ 特別支援学校の児童との交流
 - ・居住地校交流

学校評価や「家庭・地域・学校協議会」でのご意見も取り入れ、全教職員や全児童だけでなく、地域とも目標や価値観を共有しながら教育活動を進めていった。

(4) 外部機関の活用

- ① 多様性出前授業（市人権啓発事業）

III まとめ

(1) 成果

校長のスクールプランを浸透させ、学校全体でボトムアップを図ることで、人権担当やミドルリーダーなど教師自らの主体的な教育活動を導き出すことができた。子どもたちが多様な他者との協働を図ることで、話し合いながら主体的にいろいろな学びを深める姿が見られるようになった。

(2) 課題

校長自ら多様性や人権に関する認識を常に刷新し、アンテナを広げて各施設や団体との連携を図っていく必要がある。今後も、校長が直接関わる部分と、職員のマネジメントにより推進していく部分の兼ね合いを図り、効果的な校長のリーダーシップを研究する。

◎研究協議内容

田中 小規模校化について、その大きな課題は何か。市として、統合などの動きはあるか。

発表者 ここ2、3年の間に人数が減っている。学校の雰囲気はよいが、それでも生徒指導上の諸問題がある。小規模校化としての課題は、人間関係が固定しがちなところであり、コミュニケーション能力をどのようにつけていくかが課題である。市の統合の話は、今のところ出ていない。実態を整理していくという状況である。

田中 単に児童数減少ということだけでなく、学校運営上難しい面があるならば、解決していく方策が必要だろう。学校の良さがたくさんあるので、小規模校化として問題点を焦点化させなくてもよいのではないか。本校は統合した学校であるが、統合したことによる課題もたくさんある。

岡崎 学校として、自己肯定感をどうはかるか。

発表者 校舎に入ると、たくさんのありがとうメッセージや人権宣言が掲げられており、児童は褒め言葉のシャワーを浴びている。1学期のいじめ報告はなく、児童が落ち着いてきたことを感じている。また、地元大学生と交流した卒業生は、中学校でとても順応力があると聞いている。

鹿谷 地域と関わる取組一覧表は、誰が中心となり作成したか。

発表者 教頭職の時から地域との関わりを把握していたため校長が作成した。新任者や転任者にも分かりやすくするために、ねらいや活動を整理してまとめた。

岡崎 若手教員増加の中、スクールプランを一緒に考えていく上で、どのような点を工夫したか。

発表者 各校務分掌の教員と校長・教頭で話し合い、校長が感じている課題を職員に投げかけ、具体的な方策やスクールプランに関わる取組を考えた。

武本 福井市は、学校ごとに地域と関わる取組の一覧表は作成されている。ふるさと教育で、特に意識した部分やコアとなった部分について知りたい。

発表者 いろいろな人と協働することで、相手を知り、認め、積極的にコミュニケーションを図っていく力をつけることだと考えている。

◎グループ協議内容

A・教員が我慢し、子どもたちに考える時間を与え行動するのを待つことが、子どもの自立につながる。

・大規模校では、組織として動くことが大切だと考えている。学校の強み・弱みを分析して、子どもにつけたい力を全職員で考え共有して

いる。

・様々な活動において、他者を認めることを児童に価値づけして力をつけていく必要がある。認められることが自立につながり自信となる。自信がつくと他者を認め、共生社会を生きる力につながる。

B・子どもの自立に向けて、自己決定する場を設定することが大切であり、職員と共有して取り組んでいる。児童が、時には失敗する経験も必要であり、教員の丁寧な準備・関わりが子どもの力を伸ばす妨げになることもある。

・地域との活動では、ねらいやつけたい力をしっかり持つことが必要であり、地域の人も共有することが重要である。

C・学校や地域の特徴を題材として学習を進めていくことで、児童の資質・能力を伸ばしていくことができる。校長として、様々な視点で地域の資源を見つけて整理していくことが必要である。また、小さい頃に、ふるさとの良さを伝えることは大切である。

D(1) 子どもの自立や社会参画に向けた特別支援教育の推進について

・特別支援学級児童の対応について、よい方向に向かったが、その要因はいろいろある。対応案を提案し教えていくことは、校長の役目である。教員にとって、ハードルを上げ過ぎず気負わずに取り組めることが大事なのではないか。

・特別支援関係の外部機関との連携も大切である。一番大事なのは、児童の意見や感情を大切にすることであり、子ども同士の関わりも大切である。

(2) 共生社会に必要な資質・能力を育むという教育の推進について

・地域にいる若い人のアイデアや若い先生方の感性を生かしていけるよう、校長の働きかけが大切である。統合した学校の場合、学校がどうすると地域の核になるのかを考える必要がある。



(文責：越前市白山小学校 麴 かおり)

I 研究の視点

鯖江市では、市教育大綱の基本理念「ふるさとさばえに自信と誇りの持てる教育」のもと、市内共通の教育活動ならびに各地域の特色を生かした教育活動の2本柱で実践を行っている。

そこで、各校長は、それぞれの学校の目指す子ども像、目指す学校のビジョンを保護者や地域・教育委員会と共有し、その実現に向けて、「校長がいかにリーダーシップを発揮しているか、また今後どのように持続可能な方法にしていけるか」ということに焦点を当てて、以下2点について、研究に取り組んだ。

- (1) 長年に渡り、市内のすべての小学校と家庭・地域・行政が連携して行っている教育活動の意義を理解し、校長会として持続可能な方法を探っていく。
- (2) 各小学校で、それぞれの地域の特色を生かし、地域と連携・協働した持続可能な教育活動を実践する。

II 研究の概要

1 鯖江市全体での取り組み

鯖江市では、学校教育基本方針「生きる力を育む学校教育の推進」に基づき、「ふるさと学習を通じた郷土を愛する心の育成」をはじめ9つの重点施策を掲げ、ふるさと鯖江への誇りと愛着心を養うため、家庭、地域、行政（教育委員会等）と学校が連携して、主に以下の7事業に取り組んでいる。

- (1) キャリア教育の推進（3、4年生）
- (2) SDGs教育推進事業
 - ア SDGs推進センター訪問（4、5年生）
 - イ 環境教育（3～6年生）
 - （どんぐりからの森づくり事業）
- (3) プログラミング教育（4、5年生）
- (4) 体育大好き支援事業（全学年）
- (5) 学校給食畑
 - ア 給食食材に野菜を提供
 - イ 食育の授業（3年生と5年生）
- (6) 合宿通学事業（4年生）

- (7) 英語に親しむ授業（3年生～6年生）

2 各地域と協働した教育活動

それぞれの地域の特色を生かし、地域と協働した各校ごとの実践を行っている。

【実践例】

- (1) 地域団体（鯖江市やんしき保存協会）との連携（進徳小学校）
- (2) 片上地区防災協議会との連携（片上小学校）
 - ア 児童対象防災教室の取り組み
 - イ 地区防災協議会研修会への校長の参加

III まとめ

1 成果

- (1) 校長が、いろいろな教育活動におけるビジョンを示し、教職員との共通理解を図ったことで、各教職員がそれぞれの活動とビジョンとのつながりを意識して活動を行うことができた。
- (2) 地域の方々と協働する活動を取り入れたことで、学校と地域が目指す児童像を共有することができ、児童が「自分自身も地域の一住民である」という意識をもつことができた。

2 課題

- (1) 担当する教職員と外部の方との打ち合わせ等の時間不足により、内容に関する横や縦のつながりを十分に意識した活動となっていない部分が見られる。
- (2) 地域の特色をさらに生かしていくために、行政・地域とともに人的・物的環境を整え、持続可能な方法をさらに検討していく必要がある。

◎研究協議内容

山田 鯖江市全体での取り組みということだが、この7つの取り組みを行うにあたっての資金面はほとんどが市の予算で行っているのか。子どもたちからの集金なのか。

発表者 子どもたちからの集金は一切ない。取り組みのスタートは文科省や県の事業がきっかけであったが、持続するにあたって、市の予算で行っている。

道関 鯖江市の学校と行政が連携した取り組みが大変素晴らしく、うらやましいと感じた。「鯖江を愛する子どもたちを育てる」という点で素敵な取り組み。しかし、働き方改革の点からみると、果たしてこれらすべてを学校が行うのは大変ではないのか。例えば、(6)の合宿通学事業は社会教育に委ねて地域で公民館が主体となっていくとか、(1)のキャリア教育では、漆器なら河田地区、めがねならこの地区というように地域の特色を活かして取り組むなど、学校ごとのカラーがあるとよいのではないか。



発表者 7つすべての取り組みを鯖江市のすべての小学校で行っている。ただ、「学校給食畑」などは各学校によって特色はある。また「やんしきおどり」はすべての学校ではなく進徳小が盛大に行っていたり、「防災教室」は福井豪雨で水がついた経験から片上小が大々的に行っていたりするなど取り組みに軽重はある。合宿通学は、いろいろ取り組みの形は変わってきているが、学校も関わりながら、主体は社会教育として公民館が行っている。キャリア教育については、鯖江市のすべての小学校が近くに立地していることや、全小学校が給食で越前漆器を使用していることなどから、すべての学校で、めがねや漆器など同様の取り組みをしている。

細野 持続可能な取り組みということだが、一番長く続いている取り組みは何か、またその理由は何か。

発表者 一番長いのは「学校給食畑」。理由としては地域の方の協力が欠かせず、地域に農業に堪能な方がいて、いろいろな点でサポートしてくれているから。地域とのつながりが強いところが利点となっている。

松谷 取り組みを持続させていくために家庭や地域を取り込んでいるものはあるか。

発表者 例えば、「体育大好き支援事業」の講師として都会に羽ばたいていく前の地域の若いダンサーを活用している。その人たちの仕事の確保にもなっている。

◎グループ協議内容

- A・学校行事で地域の団体に協力してもらったり、地域行事は地域が主体となって運営したりと、さまざまな取り組みを持続可能なものとしていくために、校長がリーダーシップをとって、学校と地域団体をつないでいくことが大切である。
 - ・学校と行政が連携し合い、各行事への子どもたちの興味関心を高め、主体的に参加できるようにしていくことが大切である。学校・行政、双方からの要望がどちらも叶うように適切な着地点を探っていくのも校長のリーダーシップである。
- B・いろいろな教育活動において、校長のビジョンを示していくのはなかなか難しい。取り組みを実施していく上で、「伝統」ということに助けられている部分や逆に縛られているところもある。地域や企業の大きな支えのある活動などは特にそうである。校長は、伝統の良さや強さ、「この子たちのために・・・」という地域の人の想い、子どもたちの達成感や教職員の負担感などをしっかりと見極めて、舵を取っていく必要がある。
- C・管理職として、その地域の特徴や癖を知っていることは、強みになる。地域のことを知ることができると、「〇〇がやりたい!」という思いが出てくる。やらされているより、やりたいという取り組みの方が成果が出やすい。成果が出ると、地域の人にとっても「見える化」され、地域の意欲Upにもつながる。
 - ・コロナ禍を過ぎて、地域の要望がいろいろと入ってくるが、子どもたちや学校の状況を考慮して精選している。学校には負担をかけないので協力してもらえないかという提案型が多くなっている。
- D・さまざまな取り組みを持続可能にするには、家庭・地域・学校・行政の4つが不可欠である。校長は、地域や行政のつながるべき人とつながることが大切である。
 - ・校長の取り組みに対するプランが明確でないと方向性がぶれてしまう。たくさんある地域教材をどうつなげていくか、誰とつなげるか、それが校長のリーダーシップであると考えている。

(文責：敦賀市立中央小学校 竹中 由紀)

福井県小学校長教育研究大会主題・副主題一覧表

年度	大会主題（副主題）	開催地
55	世界から信頼される誠意と信念に満ちた日本人の育成 (新教育課程のめざす豊かな人間性の追求)	東海・北陸 福井大会
56	人間性豊かな児童の育成をめざす小学校教育 (創意ある教育経営の実践)	大野市
57	人間性豊かな児童の育成をめざす小学校教育 (意欲あふれる小学校教育の創造)	武生市
58	人間性豊かな児童の育成をめざす教育の創造 (教育経営理念に立つ自校の教育構想と展開)	小浜市
59	21世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (副題なし)	鯖江市
60	21世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (副題なし)	坂井郡
61	21世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (副題なし)	敦賀市
62	21世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (自ら学び、豊かな心を持ち、たくましく生き抜く子どもの育成)	東海・北陸 福井大会
63	21世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (厳しく自己確立をめざす子どもの育成)	勝山市
平元	21世紀に生きる日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (信頼と愛情につながる育成を求めて)	大野市
2	21世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (心豊かにたくましく生きる子の育成)	武生市
3	21世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (世界をみつめ、広い心をもつ実践力のある児童の育成)	小浜市
4	21世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (自ら学ぶ意欲とたくましい実践力のある児童の育成)	鯖江市
5	21世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (心豊かにたくましく生きる子どもの育成)	坂井郡
6	21世紀に貢献する日本人の育成をめざす小学校教育の創造 (豊かな心を培い、たくましく生きる子どもの育成)	福井市
7	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (自己確立できる人間を育てる学校像の創造と具現)	敦賀市
8	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (自ら考え、主体的に判断し、心豊かで、たくましく行動できる児童)	勝山市
9	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心を持ち、主体的にたくましく生きる力の育成)	福井市
10	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (自ら生きる力を切り拓き、21世紀にはばたく子どもの育成)	武生市
11	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (個性を尊重し合い、豊かな自己実現を目指す児童の育成)	小浜市
12	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と自己実現を目指す確かな力をもつ子どもの育成)	鯖江市
13	新しい時代を創造し、国際社会に貢献する日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな感性と確かな知性をはぐくむ学校経営を目指して)	坂井郡
14	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進 (豊かな心と確かな力を持ち、共存社会を生きる児童の育成)	大野市

年度	大会主題（副主題）	開催地
15	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進 （豊かな心とかかわる力を持ち、共に生きる児童の育成）	三 方 郡
16	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進 （豊かな心と自ら学び続ける力を持ち、たくましく生きる子供の育成）	東 海・北 陸 福 井 大 会
17	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進 （豊かな心とたくましく生き抜く力を持ち、共に歩む子供の育成）	武 生 市
18	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進 （豊かな心と確かな学力を持ち、たくましく生き抜いて自己実現を図る子どもの育成）	高 浜 町
19	新しい時代を拓き、国際社会を主体的に生きる心豊かな日本人の育成を目指す小学校教育の推進 （豊かな心と確かな学力を持ち、健やかでたくましく生き抜く子どもの育成）	鯖 江 市
20	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進 （確かな学力を持ち、心豊かにたくましく生きる子どもの育成）	坂 井 地 区
21	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進 （豊かな心と確かな学力を持ち、自立と共生を目指す子どもの育成）	勝 山 市
22	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進 （豊かな心と確かな学力を持ち、未来を拓く子どもの育成）	敦 賀 市
23	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進 （豊かな心と確かな学力を身につけ、夢をもってたくましく生きる児童の育成）	東 海・北 陸 福 井 大 会
24	新しい時代を拓き、心豊かにたくましく生きる日本人の育成を目指す小学校教育の推進 （豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて挑戦する子どもの育成）	越 前 市
25	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進 （豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成）	若 狭 町
26	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進 （豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成）	越 前 町
27	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進 （豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成）	坂 井 市
28	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進 （豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成）	大 野 市
29	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進 （豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成）	敦 賀 市
30	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進 （豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成）	越 前 市
令和元	新たな知を拓き、人間性豊かな社会を築く日本人の育成を目指す小学校教育の推進 （豊かな心と確かな学力を身につけ、夢と希望に向けて共に生きる子どもの育成）	小 浜 市
2	自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進 （夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び未来を生き抜く力を育成する学校経営）	東 海・北 陸 福 井 大 会 （誌 上 発 表）
3	自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進 （夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び未来を生き抜く力を育成する学校経営）	鯖 江 市 （オンライン）
4	自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進 （夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び未来を生き抜く力を育成する学校経営）	坂 井 市
5	自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進 （夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び未来を生き抜く力を育成する学校経営）	勝 山 市
6	自ら未来を拓き、ともに生きる豊かな社会を創る日本人の育成を目指す小学校教育の推進 （夢と希望の実現に向けて主体的・協働的に学び未来を生き抜く力を育成する学校経営）	敦 賀 市

あ と が き

第76回福井県小学校長教育研究二州大会を、福井県教育長 藤丸伸和様、敦賀市長 米澤光治様をはじめ、多数のご来賓をお迎えして、敦賀市プラザ萬象、生涯学習センター、敦賀市立図書館を会場として開催いたしました。

皆様のご理解とご協力により、全日程を予定通りに進めることができました。ご参加いただきました皆様には改めて感謝申し上げます。県内の校長先生方が一堂に会し、直接顔をつき合わせ情報を交換することができたことは貴重な機会になりました。

本大会は、「自ら未来を拓き ともに生きる豊かな社会を創る 日本人の育成を目指す小学校教育の推進」を主題として、学校経営の責任者である校長の果たすべき役割と指導性について8分科会で研究や実践が紹介されました。また、研究協議では提案者の事例を基に意見を交換する中で、自らの考えを広げ、深め、改めて校長としての使命を再認識することができたのではないのでしょうか。

皆様におかれましては、二州大会の成果を収録した本研究紀要をご一読いただき、今後の本県小学校教育推進の一助にいただければ幸いに存じます。本大会において、貴重な提案発表をしていただいた各ブロックの校長先生方、そして、記録・編集等の任に当たられました関係各位のご苦勞に対しまして深く感謝申し上げます。

最後になりましたが、本大会のために、細部にわたりご指導・ご支援をいただきました福井県教育委員会、敦賀市、美浜町、並びに緻密な準備・円滑な運営に誠心誠意ご尽力いただきました二州地区の校長先生方と県小学校長会教育研究委員会の校長先生方に心より感謝申し上げ、お礼の言葉といたします。

ありがとうございました。

福井県小学校長教育研究委員長
敦賀市立中郷小学校長

木 原 茂 子

福井県小学校長教育研究二州大会 研究紀要 (No.50)

令和6年10月発行

編 集 二 州 地 区 小 学 校 長 会

発行者 福 井 県 小 学 校 長 会

発行所 福井県小学校長会事務局

福井市御幸3丁目10-20

近藤ビル1F

TEL.0776-25-0142

印刷所 若 越 印 刷 株 式 会 社

敦賀市衣掛町413番地

TEL.0770-22-5600
